

# 三国聾学生国際交流 PEN-International親善大使の中国訪問

筑波技術短期大学  
松藤みどり

## 1. PEN-Internationalとは

「筑波技術短期大学から3人の学生と2人の教員を中国に派遣し、親善大使として天津理工大学（中国式には天津理工学院）の中に設置されている天津聾工科大学（天津聾人工学院）の学生、教職員と交流するように。交通費、滞在費はPEN-Internationalが負担する。アメリカからは6人の学生、2人の通訳、2人の教職員を派遣する。」

今まで考えたこともなかった交流計画が21世紀幕開けの春、PEN-Internationalの事務局長、NTID（ナショナル聾工科大学）のデカロ博士から提案された。

PEN（Post-secondary Education Network）-Internationalとは、世界各国の聴覚障害者のための高等教育機関をネットワーク化する5ヶ年のプロジェクトである。2001年6月に日本財団の出資を受けて正式に発足し、筑波技術短期大学（技短）は、NTID、天津理工大学、モスクワ工科大学とともに、その一員となっている。

## 2. 筑波技術短期大学の取り組み

技短は次のようなスケジュールでこのプロジェクトに取り組んだ。

5月 学生募集開始  
6月 学生応募締め切り  
7月 選考と結果通知、課題の指示  
9月、10月、11月 ほぼ2週間おきのオリエンテーション  
11月25日出発  
12月1日帰国

聴覚部の160余名の学生全員に募集要項を配布した結果、7名が応募した。書類選考と面接を経て、二年生の3名が選ばれた。3名とも成績上位の学生で、2名は英検準2級に合格、他の1名も同程度の英語力である。2名は3月に実施されたアメリカ研修旅行に参加して、ASLでコミュニケーションをした経験があった。

選ばれた学生には、自己紹介と技短の紹介の英作文を夏休みの課題とした。

9月11日にアメリカの航空機を用いたテロ事件が勃発し、このプロジェクトの実行が危ぶまれる一幕もあった。デカロ博士は10月1日にRIT（ロチェスター工科大学）のNTID担当副学長、ロバート・ダビラ博士を伴ってPEN-Internationalラボの開局式のために技短を訪問し、テロに対する恐怖を克服して国際交流を続けることの重要性を力強く訴えた。日本側は、日本の航空機を利用すること条件に、計画を遂行することにした。

## 3. 言語の問題

このような国際交流の場で問題になるのは、まず言語である。このプロジェクトでは3種類の音声言語と3種類の手話が必要であった。NTIDには、RITで学ぶ学生のための手話通訳者が100人おり、そのうちの2人が来ることになっていた。教職員は、ASLのみならず、日本語と日本の手話にも堪能な言語学者スーザン・フィッシャー先生と、研修旅行でいつもお世話になるビジター・センターのロバート・ベイカー氏が派遣されることになった。天津側は、理工大に英語専門の通訳の方がいて、事前の必要な連絡は彼を通して行われた。専門の

手話通訳者はおらず、教授陣が交代で学生に対する通訳を担当した。日本側は中国籍で日本語にも英語にも精通している建築工学科の張先生と私が行くことになった。張先生の中国語と英語の間の通訳は、アメリカ人にも有益であった。私は英語と日本人学生との間の通訳を担当した。

親善大使としての学生の任務の一つは、それぞれの国の教育制度について発表することであった。日本人学生は何語で発表すべきだろうか。これが準備段階での第一の問題であった。三人の学生は、かなり明瞭な日本語を発声することができ、授業では英語の発音も指導している。しかしながら、中国とアメリカの聾の学生を前に、日本人の聾学生が音声英語で発表したとして、どれだけの意味があるだろう。学生と協議し、フィッシャー先生とも相談した結果、パワーポイントに英語を提示し、音声と手話を伴った日本語で発表することにした。提示する英語の指導にはかなりの時間を費やした。幸いなことに、三人ともパワーポイントには習熟しており、有効な提示ができたと思う。

学生同士の会話には健聴の通訳が介入する必要はほとんどなく、彼らなりに工夫してコミュニケーションを取っていた。施設見学などの場面では、アメリカには二人の専任通訳による情報保障がなされたのに対し、日本側は素人が外国語から手話への通訳をしなければならず、不十分な伝達になったことは残念であった。

#### 4. 異文化理解のために

言語の次に問題となるのが、出し物とお土産である。アメリカ研修旅行にも、日本の文化を理解してもらうために、寸劇や踊りやゲームを用意して行くが、今回はたった三人なので、学生の一人がサークル活動としてやっている「民舞」の「御神楽」を踊ることにした。豊作を祈ったり感謝したりするために奉納する扇を使った短い舞を、三人は相当な時間をかけて練習したようである。

発表の場は、二日目の夜、天津の聾の学生のダンスや寸劇、理工大の聴の学生のカンフーの演技の後の大舞台と、四日目に天津聾学校を訪れたときの二回あった。

理工大のカンフーにはインターナショナル・チャンピオンも登場し、質の高い迫力のある演技であった。その後日本人学生は、音楽も鳴り物もない素朴な舞を優雅に堂々と披露し、拍手喝采を浴びた。聾学校では借りた扇子がひらひらした羽根のついたもので、踊りの雰囲気が変わっておもしろかった。

お土産は、CADを使って作った技短のキーホルダーに、市販の午の根付をつけ足したものと、I Love You のマークの焼き印を押したお饅頭をあつらえて用意した。「午」は中国人には「来年の干支」とすぐにわかってもらえたが、東部出身のアメリカ人たちには説明が必要だった。I Love You を表す中国語は「我愛你」である、と言っていると、張先生から「中国語ではそれは『結婚して下さい』という意味になります。」という説明が入り、日米の学生は、その言葉は気をつけて使わなければならないことを理解した。

これらは異文化理解のきっかけとなる小道具であったと言える。中国の学生からのプレゼントは、手工芸品、印鑑、書道の作品など、ほとんどが手作りであり、アメリカからの、NTIDのマーク入りの帽子やマグカップなどとは対照的であった。

#### 5. 今後の計画と学生の反応

日本人学生は、礼儀正しく社会的であるとの評価を得て、アメリカの学生に少しも引けを取らずに立派に親善大使の役割を果たした。初年度の成功を受けて、この交流プログラムはあと4年継続される見通しとなった。5月に中国の学生が日本に立ち寄り、日本の学生と共にアメリカに渡る、という計画も始まっている。PEN-Internationalの奨学金により、技短からは毎年アメリカに6人、中国あるいはロシアなどに3人の学生が派遣されることになる。この交流活動を通して学生が何を感じ、何を得たかは、彼らの手記から一番良く知ることができるであろう。

